

大東ふれあい運動場整備計画地内  
の遺跡調査報告書

# 立山要塞・奥明砦

1996年1月

島根県  
大東町教育委員会

## 序 文

大東町では、平成7年度から8年度にかけて大東ふれあい運動場整備事業を計画しました。この予定地は、斐伊川の支流赤川の中ほどにひらけている大東盆地の西端に張り出す低丘陵地上にあり、すでに隣接して奥明石跡の存在が指摘されています。このため、事業計画地内に関連する遺跡の有無と確認の調査を実施することにしました。

調査は、第1次と第2次に分け、それぞれ確認調査と発掘調査を行いましたが、第1次調査によって、予定地東南部に中世の要塞跡があることがわかり、地名をとって立山要塞跡と呼ぶことにしました。

この地域一帯は中世後～末期に尼子、毛利攻防戦の渦中となったところであり、近辺にもいろいろな城址や要塞跡が見られます。戦国時代の歴史を学ぶ上で貴重な資料と思われますので、整備事業予定地を一部変更して立山要塞跡を残すことになりました。

立山要塞跡については、運動場の環境整備に合わせて手を加え、学習に資するものにしていく必要があります。

この報告書が有効適切に活用され、町民各位の歴史に関する知識や文化財に対する関心が更に深まり、豊かな文化の町を志向する大東町のまちづくりに生かされることを願ってやみません。

この調査にご協力、ご援助いただいた地元の各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成8年1月

大東町教育委員会

教育長 小川喜義

## 例　　言

1 本書は大東町教育委員会が平成7年度に実施した、大東ふれあい運動場整備計画地内及びその周辺にかかる大東町大字飯田及び養賀所在の、立山要塞と奥明砦の遺跡調査報告書である。

2 調査体制は次のとおりである。

調査主体者 大東町教育委員会 教育長 小川喜義

調査事務局 新田裕至 三原英男 黒田直幸 野々村達志（町教育委員会）

調査担当・調査員 杉原清一 藤原友子

調査指導 烏根県教育庁文化財課課長 勝部 昭

　　山根正明（県中近世城館調査指導員）

　　蓮岡法暉（県文化財保護指導委員）

調査作業 青戸延夫 安立一男 新田憲道 景山政胸 山本長市

　　本山義夫

調査期間 第1次 平成7年3月18日～4月4日

　　第2次 平成7年5月12日～6月15日

3 本書執筆はⅣ章Dを蓮岡法暉が行ったほかは杉原清一が行い、挿図浄書は藤原友子が行った。編集は調査者が行った。

# 目 次

序

教育長 小川喜義

例 言

I はじめに.....	2
II 地理的歴史的環境.....	2
III 遺構の配置と調査地点.....	4
IV 調査結果	
A 奥明岩関連遺構.....	4
B 立山要塞堀切部付近.....	7
C 立山要塞の縄張り.....	12
D 丘陵端頂部.....	16
V まとめ.....	17
付記（遺跡名の改廃）.....	17



## I はじめに

大東町は文教区域として大東ふれあい運動場整備事業を計画した。この予定地には隣接して奥明砦跡が周知されている。このため事業計画地内に関連する遺跡の有無の確認と調査を行うこととなった。

調査の経過は次のとおりである。

第1次調査は平成7年3月18日から4月4日まで、踏査とトレンチ掘りによる確認調査及び関係地の地形測量図を作成した。これによって奥明砦の曲輪下端に切岸があり、これより尾根上の路を廻ると字立山に至り、大きな二重堀切りを経て完備した要塞に達していることが判った。この要塞を小字地名によって立山要塞とよぶこととした。<sup>なでやま</sup>

第2次調査は平成7年5月12日から6月15日まで行った。これは先の成果により、関係地内の遺構が予想又は存在する部分4か所の発掘調査である。併せて新しく発見した立山砦の縄張り実測を行った。

この間6月5日には山根正明氏（県中近世城館調査指導員）の現地指導を受けた。

## II 地理的歴史的環境

この遺跡は斐伊川の支流赤川の中ほどに拓ける大東盆地の西端に張り出す低丘陵上に位置する。赤川に沿って西へは出雲市方面へ、鉄道・県道によって南へは本次を経て奥出雲への古くからの道路があり、いわば十字路の交点にあたる位置ともいえる。

この丘陵において周知されている遺跡は、奥明砦跡、西方寺の宝篋印塔、立山城戸跡があり、東隣りの丘陵上には八幡山砦跡がある。

奥明砦の北は赤川が西に流れ、その対岸は中世馬田氏の本拠地である馬田寺跡がある。また奥明砦の麓には“竹ノ下”、“土居”など中世の居館を示唆する地名があり、八幡山砦跡付近には平家伝説もあったとされるところである。立山要塞の東麓には西方寺があり、近くに龕入りの宝篋印塔があつて有力者の存在を示している。

この地域一帯は中世後～末期、尼子・毛利攻防戦の渦中となつたところであり、鞍掛氏の高麻（佐）城、大西氏の大西城、馬田氏の岩熊城や丸子山城、佐世氏の佐世城など著名な中世城郭が密に分布している。



図1 周辺の遺跡と城砦分布（大東町遺跡地図より）

27 佐世城跡	30 岩熊城跡	31 丸子山城跡	33 阿用城跡	86 福高城跡
93 奥明石跡	108 竹平砦跡	109 小木戸城跡	167 西追遺跡	168 西方寺の宝鏡印塔
169 八幡山砦跡	173 古城砦跡	174 磬丸砦跡	223 伝・白神陳跡	228 つくし城跡
235 駒谷砦跡	296 西方寺上古墳群	297 西方寺上横穴群	298 立山城戸跡	

### III 遺構配置と調査地点

奥明砦中心部と立山要塞の繩張り実測及びその間を連絡する支尾根上について、平板による地形実測を行い、第1次調査の結果に加えて地表からの観察を行った。

奥明砦は奥明の小さな谷奥の北上方の高まる丘頂を基点とし、北の加勢崎と東の奥明の支丘端に小曲輪を配置する構成であり、後背部は幅の広い堀切りで続き尾根を切断している。

立山要塞は奥明谷奥の南に位置する南北に長い痩せ尾根の丘陵で、5方向に低く派生する支尾根をすべてその基部で掘り切って独立させたものである。この主曲輪の東麓には西方寺があり、西裾には小館を思わす削平段地形が造られている。

この二つを結ぶ尾根とそれから分岐する尾根上には断続的ながら小路のあとが観察された。また立山要塞から堀切りを経て南へ延びる丘端は高まりを示し、何らかの遺構が存在するかと思われた。

奥明砦中心部と立山要塞ほとんどは施工計画外となることから、現況のまでの繩張り測量（第2地点）のみの調査とした。発掘調査は奥明砦南端の堀切り部（第4地点）、それに続く尾根上の跡跡と思われる部分（第5地点）、立山要塞の西裾の大堀切り部とその付近（第3地点）とし、少し離れた南端の丘陵頂部（第6地点）については試掘によって遺構の有無を確認することとした。

### IV 調査結果

#### A 奥明砦関連遺構（第4・5地点）

奥明砦から立山要塞方向へ連なる尾根への基部は、大きく幅広い堀切りによって切断したところ（第4地点）である。

発掘調査は、奥明砦主曲輪下端から尾根方向への縦断トレンチ（図5T1）、尾根側に掘り残した位置での横断トレンチ（図5T2）、及び尾根部のやや下った位置での横断トレンチ（図5T3）によって観察し、これらトレンチの間をそれぞれ発掘した。

縦断トレンチによってみると、主曲輪裾で最も深くなる削り斜面で掘り幅は最も狭いところで4mあり、この底面は続く尾根側に高い傾斜面をなし、尾根側では高さ約1mの削り下ろしあつた。また、この堀り底から40cm高い位置の主曲輪裾に、幅55～60cmのテラス状の抉り込みが堀切り部に面してあり、このレベルで堀切り部埋土中に踏圧面が認められる。

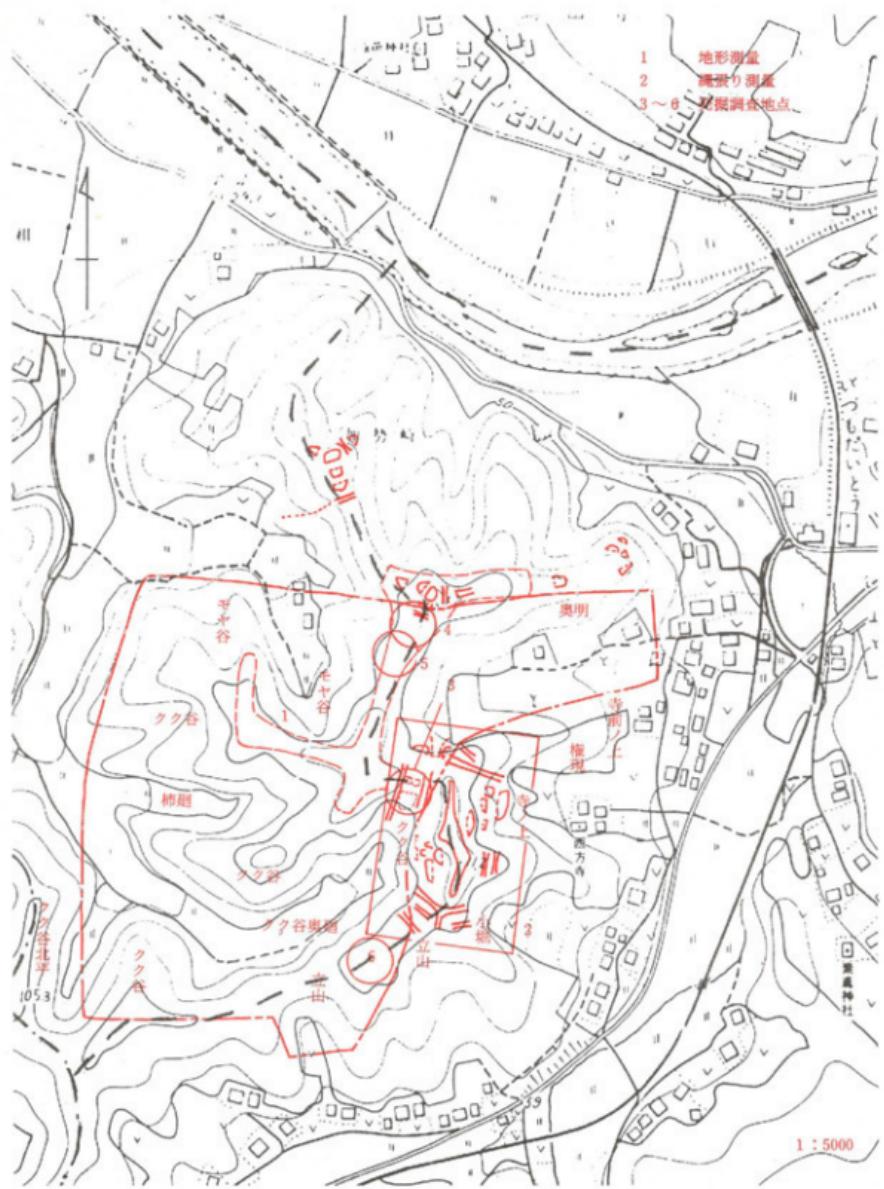


図2 奥明智・立山要塞調査図

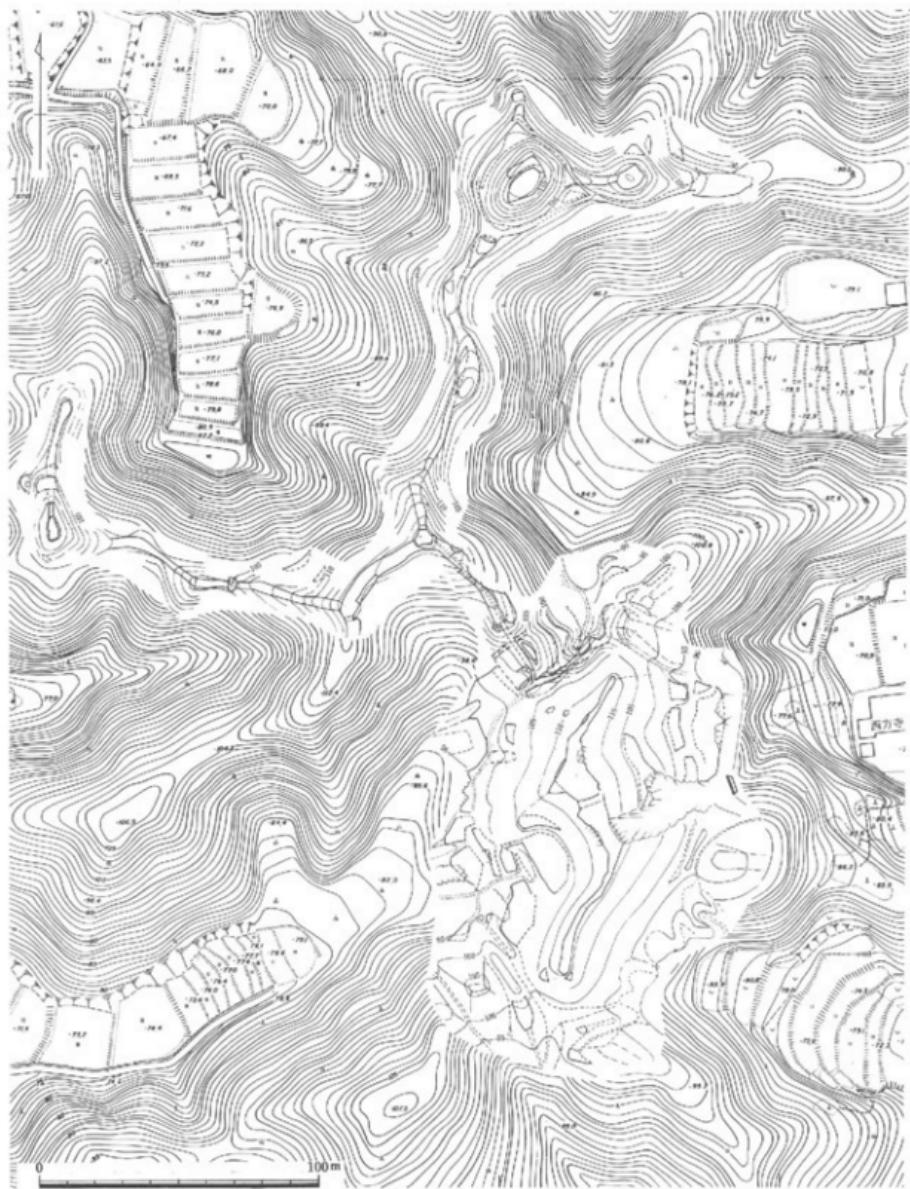


図3 奥明堺・立山要塞主要部測量図

このように土層断面の状況から、この堀切りは先ずやや傾斜の緩い削り岸の下端に鈍角で浅い薬研掘りがなされていたが、のちに主曲輪の切岸を急角度とし、堀切り部は浅い箱堀り様式に改めたもので、その下端が狭いテラス状の切り込みとなり、堀り底面は以前の薬研堀り底面より約40cm上ったことになる。

またT2・T3にみられるように、堀切り底面から埋め出し小テラスへ、そして狭い段状の尾根沿いの小路へと続く。

このように堀切りは、幅広い鈍角な薬研堀りをのちに箱堀りとし、その掘削土で谷奥に埋め出した小曲輪を造り、それから尾根沿いの小路へと連絡させた構造であった。

第5地点とした尾根上のややフラットな部分は、3本のトレンチによって観察した。地表ではほぼ平坦な幅のある尾根上であり、部分的には削平されているのかと思ったが、地山は若干起伏しており、その上に風化土の表土が積もっているのみであった。そしてこの表土層中に幅0.5~1.0mの踏圧された面が認められた。このように、奥明谷堀切り部から尾根に沿って自然地面上に通路が連続することが判った。

## B 立山要塞堀切り部付近

奥明谷奥からクク谷奥へ越す鞍部は、踏査の結果立山砦の北西裾の大きな堀切りと曲輪の遺構であることが判った。

尾根を横断する長さ16m余りの大堀切り部と、それに接する10×15mの緩斜する曲輪について発掘調査をした。

尾根筋側の大堀切りは急峻な両薬研堀りで、その北西側切岸の最も高い所では約5mを測る。尾根の先端付近には奥明谷に面して掘り残し土壘と穴走り構造が認められる。南東は掘り残し土壘のある緩斜面の曲輪で、その曲輪面からの落差も約2.5mである。この堀切り底はほぼ水平で南西のクク谷奥方向へはさらに段落ちして空堀りが接続する。

また北東方向へは切岸状の急斜面へ放出して急落する短い駆堀りとなり、虎口に備える。この堀切りは埋没していたが、すべて同質の真砂土でやや粗粒の砂が断面U字形をなして重複しており、崖上からの自然崩落堆積の状況であった。なお、堀底部にはやや暗色の粗砂が堆積している。

この大薬研堀りに接続する空堀りは、クク谷奥へ緩斜して落ちるもので、断面逆台形の箱堀りである。

立山要塞主郭裾と上記の大堀切りとの間は奥明谷側は切岸とし、その上に掘り残し土壘を造り、南東側は緩やかに下降するフラットな面を造っている曲輪の一つとして整地されたものである。土層断面からみると、上方尾根部の削り出し土や堀切り部の掘削土を盛り

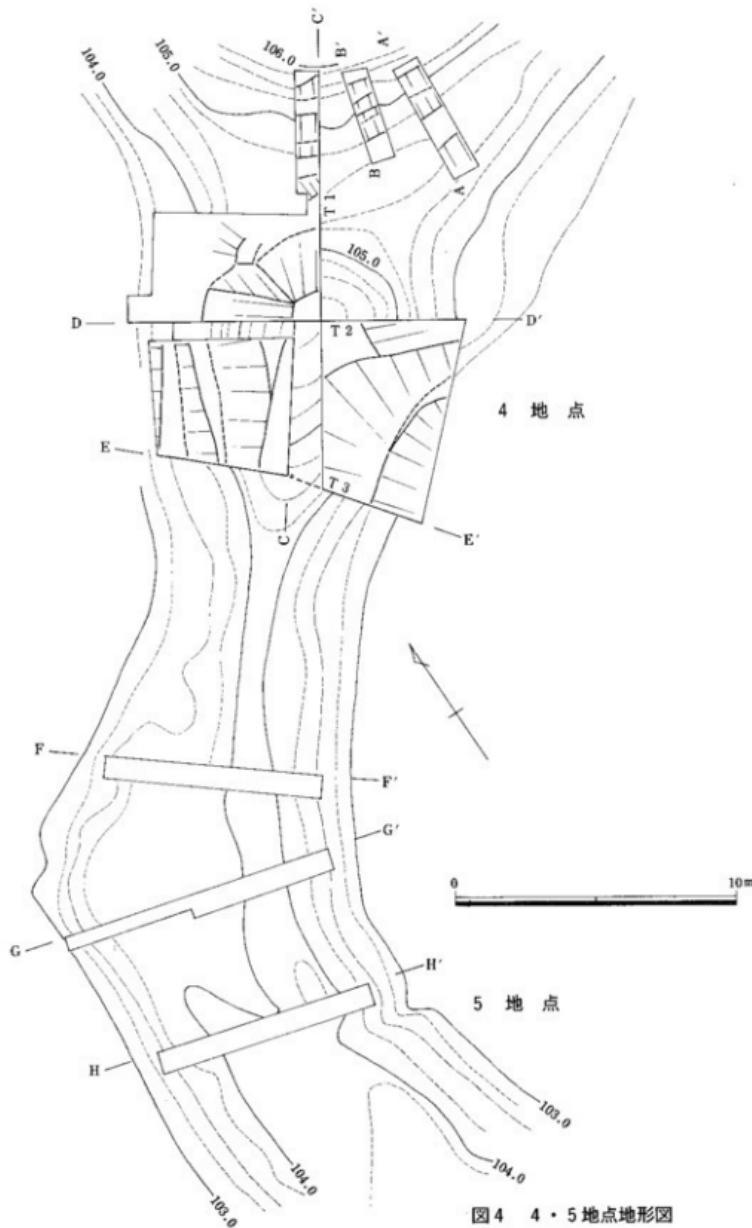


图4 4·5地点地形图

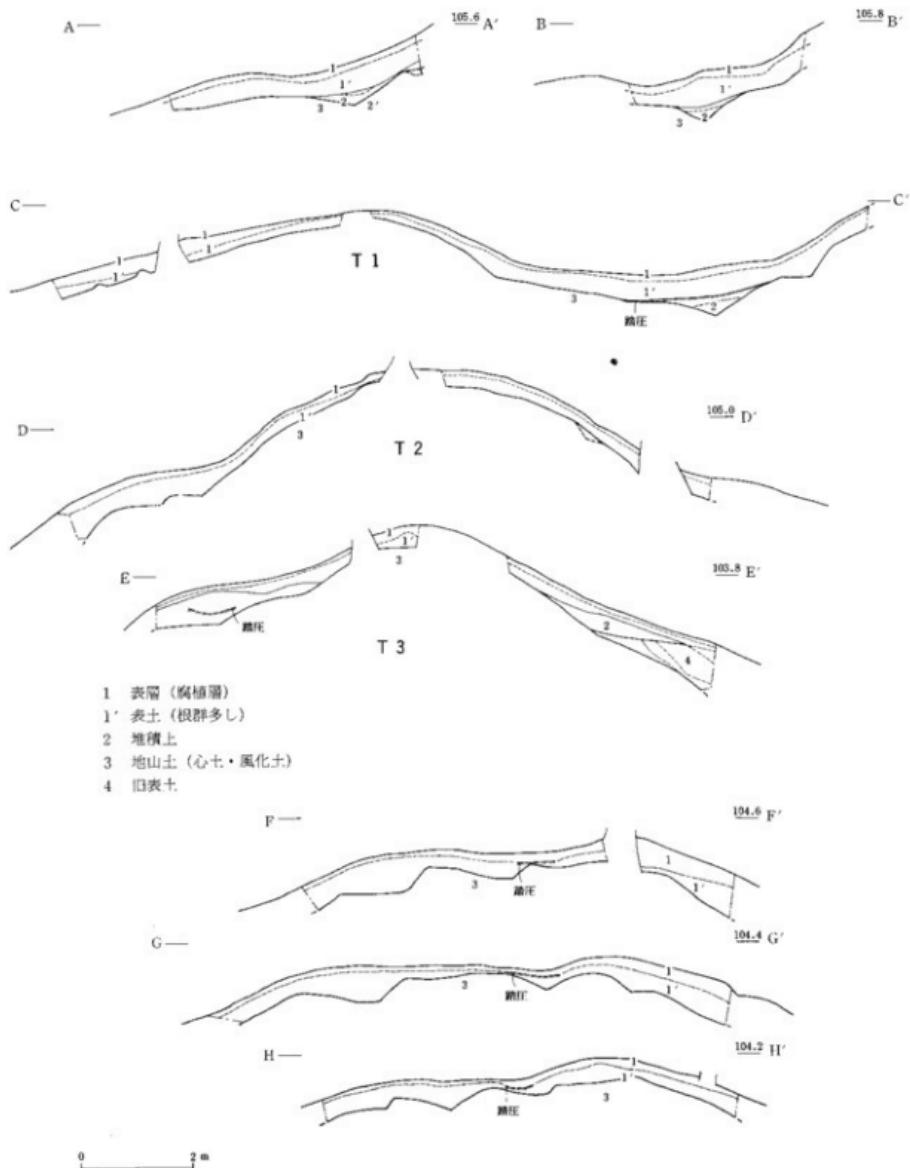
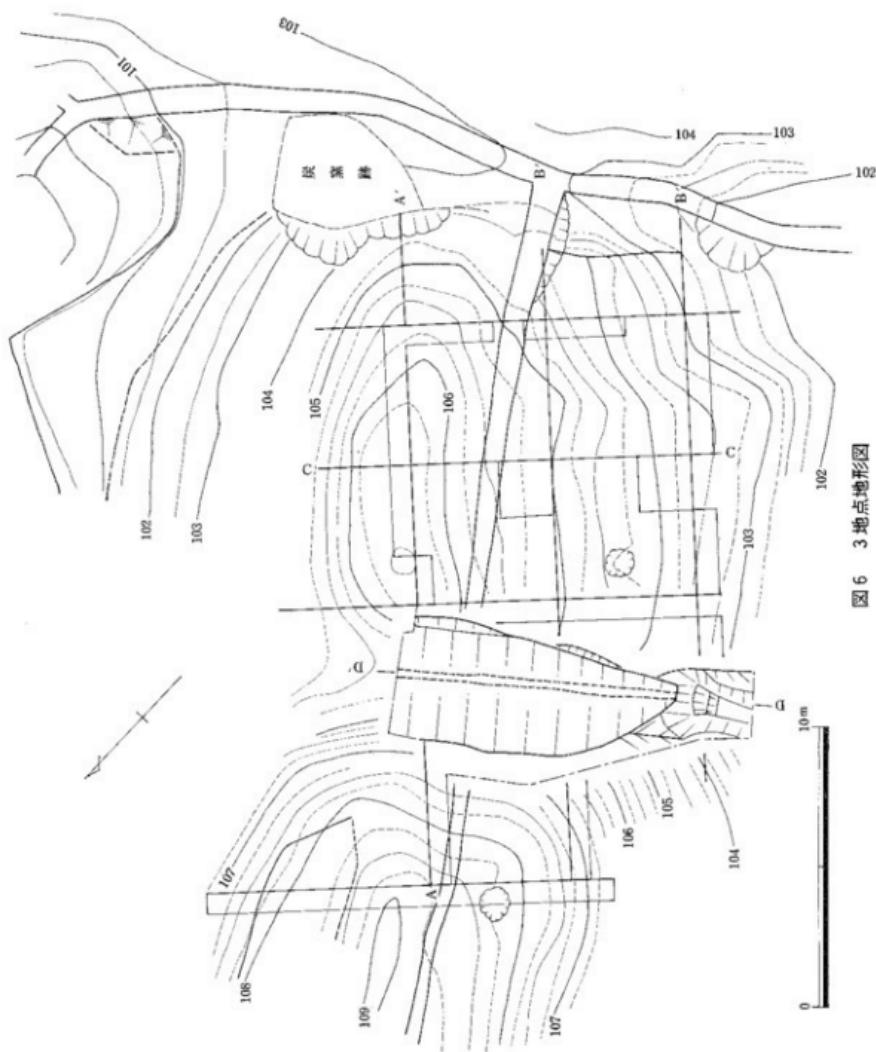


図5 4・5地点トレンチ断面

图 6 3 地点地形图



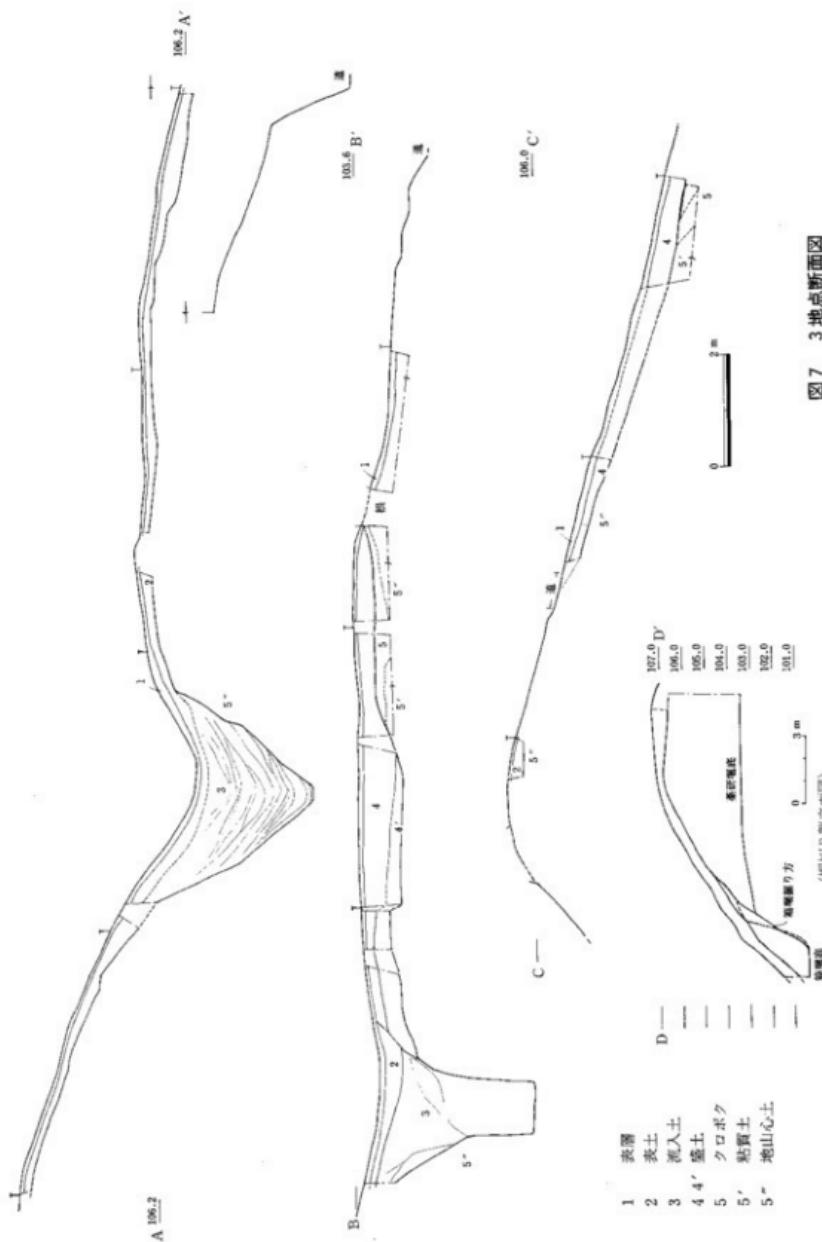


图 7 3 地点断面图

出してクク谷奥に張り出す勾配のある略方形の曲輪を造成したものである。そして、この曲輪から主郭の裾を南へ、クク谷奥居館跡推定地へと路が続き、北西は上記した堀切りと空堀りによって自然山腹と区画される。

この曲輪面には柱穴等の何らも認められなかつたので、一種の勢溜り様の使途が想像される。

### C 立山要塞の縄張り（図8）

地表から観察される曲輪配置等の縄張りを地形測量によって記録した。調査はトランバース測量によって岡根点を設け、半板を用いて細部の地形測量を行つた。

この要塞は大字飯田と養賀の境にあり、南北に長い瘠尾根を中核とする約200×120m、比高55mの丘陵である。大字飯田側（東）の裾に西方寺が、北へ続いて「土居」「竹ノ内」の地名があり、さらにそこから「奥明」の小谷が入る。西方寺から南へは字「立山」である。

西方の養賀からは、奥明砦の先端である「加勢崎」が赤川に張り出すところから入り、大きく迂曲する深い谷「クク谷」の奥の詰まるところに位置することになる。

縄張りを概観すると、極く狭く長い帯状の主曲輪部、その東側寺ノ上曲輪群が搦手とみられ、西側クク谷奥の大手曲輪群、そして北方奥明谷奥の虎口部から成る。また、丘陵から連続する北や北西及び南西方向への尾根筋は、二重及び三重の大堀切りで切断し、東や南東へ派生する低丘陵も同様に二重堀切りで強く切断して独立させたものである。

以下各部分について記す。

#### 1 主曲輪部

瘠せ尾根上に設けた主曲輪部は極めて狭いもので、大まかに3段である。

ほぼ中央にあたる最高所の曲輪1が最も幅広く、北西端に低い上墨が認められる。北へは幅約2m帯状に細く突出し、中ほど西縁に一部土墨が残る。北端では約2m低く、北裾の堀切りと奥明虎口部を見下ろす。また上墨端から西へ傾斜する三角形の面が造られていて横矢掛と思われる。

曲輪2は、1.6mの落差で南に隣接し、長さ12m最大幅5mで、南へ細まって尾根上の通路程度となる。この曲輪の西下に大手の虎口が位置する。

さらに南へ幅1~2mの通路状の曲輪3が下りながら続く。先端では1.8mの落差があり、眼下に2方に分岐するところの大堀切り群を見下ろす。この先端には少し下って小曲輪が2面付随し補強している。

これら主曲輪部の側斜面は、いずれも急で落差も大きく切岸であったかと思われる。

## 2 大手曲輪群

曲輪1の南端から曲輪3へかけて半円形に囲む西側下方に造られた一群で、中央一段高く奥まった曲輪5が主となる。これには脇に一段高い曲輪4が備わり、前方は横堀りを置いて両脇一段低く曲輪6・7が構える。この6と7との間を登り詰めて横堀り底に達する路が、大手の行き詰りとなる虎口であり、小さいながら両袖樹形プランである。

曲輪6の下には、張り出す地形上に曲輪8・9・10を置き大手路に備えている。なお、曲輪9・10は間にシャープな豊堀りを造り、ほぼ同レベルで並んでいて、横手路によって奥明谷の虎口へと連絡している。また曲輪7は、その奥端から南のY字状の堀切り（II-1及びIII-1）底へ連なる。

## 3 寺ノ上曲輪群

災害によって大きく崩壊しているが、現況で曲輪19～22が認められる。

曲輪19は主曲輪に近い高所にあり、路が曲輪1・2へと連絡している。その下方にあたる曲輪20～23は狭く小さい面であり、曲輪20と22の間は落差があり、20と21の間は堀で仕切られている。これらの一段下に広い曲輪23があって、その北側には堀切りに面して曲輪22から掘り残し土塁が延びている。この曲輪の前面は崩壊が著しいが、すべて切岸であったようだ。

そしてさらに前方下方には現在西方寺があり、その裏手から小路が堀切りに沿って曲輪22へ登ってきている。

このようにみると、この一群の曲輪は搦手に相当し、西方寺あたりに居館を推定することが可能である。

## 4 堀切り群

この要塞には特に壮大な堀切り群が造られている。部位によって第I～IV群として概況を記す。

**第I群：**これは奥明谷奥とクク谷奥との間に設けた尾根切断の堀切りで、曲輪1西下端のI-1堀切りは底幅を広くとり、堀底を通路としてその北端に奥明谷の虎口とし、南は堀回りで大手曲輪群に通ずる。この堀切りから17m離れてI-2堀切りを造る。これは高さと勾配の強い薬研堀りとそれに続く箱堀りであり、発掘調査したもので前節に詳述したとおりである。

図 8 立山要塞地図



この二つの堀切りの間には傾斜のある広い曲輪14・15の二面が造られ、その北端の尾根部は掘り残し土壘とし、切岸の下に奥明口虎口に面して中段に狭い曲輪24を添えている。

このように、この第I群堀切りは奥明砦とを結ぶ尾根筋の強い墨線の基部としての働きをもつものである。

**第II群：**主曲輪から南西へ続く尾根を厳しく3重に掘り切ったもので、大手曲輪群とともに大手虎口部を構成している。

主曲輪3の直下にあたるII-1堀切りは、主曲輪側は高低差12mの切岸とし、堀底は通路となりIII-1堀切り端と合流する。そして上幅2~2.5m、高さ2m弱の低い削り出し土壘を間に置いてII-2堀切りを造る。この堀切りは浅く狭いもので、南西尾根側は自然尾根から約3m削り下ろし、虎口側は下端を曲輪16に接続している。この自然尾根も頂部で10mほどいくと、III-3堀切りで切断される。この深さは約3mで、断面V字形、斜面に沿って急降下する。

なお、III-1と-2の間の土壘は、長さ18mの上面を削平し、さらに南に続いて一段落して長さ10mの曲輪17を造り、さらに10mほど稜状の墨線を延ばし、次のIII堀切り群との間に豎堀状の堀りを造り、字「立山」の小さな谷地形の奥に対応している。

このようにII堀切り群は最も厳重な防備構成の部分となっており、さらにこの尾根をいくと高まりがある、後に記すように物見があったと想像される。

**第III群：**II群堀切り部と接して南東に派生する低丘陵の基部に設けた堀切りである。主曲輪寄りIII-1堀切りは、II-1堀切りと同様に片側岸に切り、底幅は広くII-1堀切りと合流して南へ急降下する。

東側は急勾配で下り、字「小堀」の浅い谷奥に至る。

さらに続く丘陵の頂部を約3m残して次のIII-2堀切りを造る。これは浅く断面V字状に切り込むもので、降った西端には小さい曲輪18が接続し、曲輪17と呼応して字「立山」の谷奥に対応する。

**第IV群：**西方寺を囲むように南側に張り出す低丘陵の基部に設けた堀切り群で、IV-1(内側)とIV-2(外側)の2重堀切りである。この2条の堀切りの間は、上幅約1m長さ16mほど削り出して土壘状としている。切断された先方の丘陵は頂面が広く平坦で、東へ緩やかに下る自然地形のままであるが、そのまま出張り曲輪とみることも可能である。

**第V群：**西方寺と奥明谷を隔てる丘陵を切断する堀切り群で、V-1・V-2の2条から成る。内側のV-1堀切りは、主曲輪側は高く急な岸とし、底は通路となり奥明口虎口から搦手へ越している。この堀りは南東の搦手筋へ長く延びて寺の上に至る。

尾根上幅4mを残して次のV-2堀切りが造られている。深さ1mほどで南東寺の上方向は斜面を長く流しているが、北西の奥明谷側へは短く、虎口からの横手路までで止めている。そして横手下には小曲輪25・26・27が段状に造られて、虎口部に対している。

この第V群堀切りで切断した尾根はさらに長く延びて、西方寺下手の匂いで奥明谷との隔壁となっている。そして先端裾部には「土居」「上屋敷」など居住区画を示す宅地群がある。

(杉原)

#### D 丘陵端頂部（第6地点）

この場所は、立山要塞第II群堀切りを経由して南へ尾根上約80mの地点で高まるところであり、これまでに実施した分布調査で古墳の可能性が指摘されていた。このため遺構存在の確認のため試掘調査を行った。

調査は丘陵頂部で直交するトレンチを設けて観察した。

丘頂部には径約5mの略円形の平坦面が認められたが、この範囲は地山まで深さ10cm以内と浅く、地表面には多くの根株の跡がみられた。この地点は山道の中継地点で、雑木等比較的少なく、長年人々に踏み均された形跡がある。発掘調査面

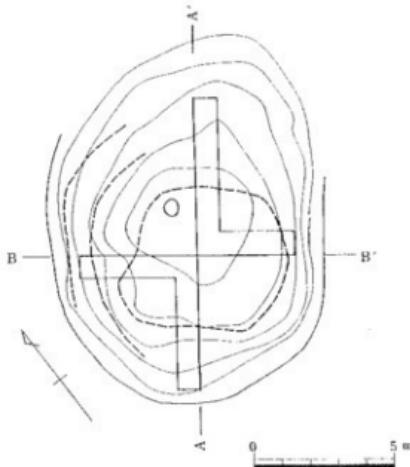


図9 6地点地形図

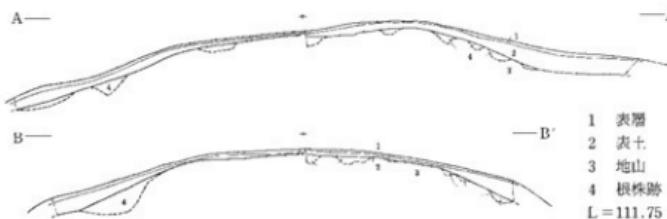


図10 6地点土層断面

には遺構等は認められなかった。

また地表からは周辺に帶状平坦部が存在するようにも観察されたが、平坦面周囲の斜面で傾斜が少し緩かになった部分がこのように見られたもので、調査の範囲ではテラスの存在を示すものは発見されなかった。

遺物の出土等もなく、遺構と考えられるものは検出されず、遺跡は存在しないと判断される。  
(蓮岡)

## V　まとめ

この調査で明らかにした立山要塞は、高い壘状の主曲輪群と、派生する尾根をその基部で二重三重の堀切りで厳しく固めた拠点的なものであった。切岸や土塁等の防衛ラインからすると、北西方向即ち赤川下流方向に対する構えかとみられる。

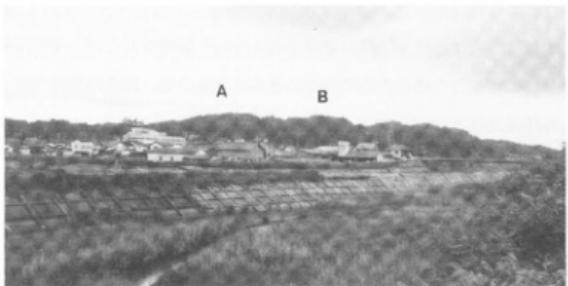
そしてまた加勢崎から連なる奥明岩も片側面を切岸状とした尾根筋によって連係した構成であり、南端は尾根の高まる第6地点も自然地形のままで、物見として活用されたと思われる。

この要塞の虎口は、大手とみられるクク谷奥と脇虎口とみられる奥明岩とが特に顕著であり、西方寺裏からの路筋は握手と考えられる。因みに麓の西方寺から北へ、土居・上屋敷・竹ノ内などの地名があり、居住区域であったことを示唆している。

時代観に関しては出土遺物等もなく、地元での伝承等も聞かれない状況で明確ではない。しかし、遺構のうち特に堀切り構造の複雑さ、薬研堀りと箱堀りの組合せ、或は薬研堀りから箱堀りへの改修の痕跡などから、大まかに中世末の様相とみることができよう。そしてこの一連の防衛拠点は、本城的ではなく所領境に設けた拠点の一つとみるのが適当であろう。それにしても壮大な堀切り群に比べて主曲輪は簡素であり、改修中途で廃棄されたものかとも思われる。

**付記** 従来周知されていた下記の遺跡は、それぞれ立山要塞の各部分であったことが今回の調査で判明したので、各遺跡名を次のように改称する。

旧	新	理由
No298	立山城戸跡	立山要塞 範囲を拡大して改称
No297	西方寺上横穴群	(廃止) 災害による陥没凹入部の誤認
No296	西方寺上古墳群	(廃止) 二重堀切り部の誤認



立山要塞・奥明岩遠景（赤川より望む）



同上近景（A：立山要塞 B：奥明岩）



航空写真（下方が北）



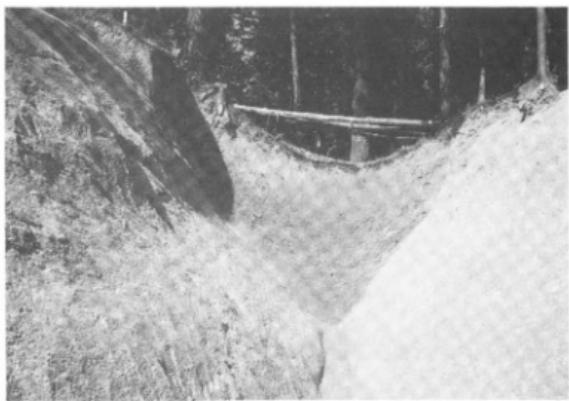
立山要塞掘切り I - 2  
発掘前状況



同上  
発掘状況



同上  
発掘作業



立山要塞堀切り I - 2 (薬研堀)



同上堀切り I - 2 (薬研堀と箱堀)



奥明岩堀切り部  
手前…残丘尾根部  
後方…堀



奥明岩堀切り部  
残丘南側



奥明岩堀切り部  
堀底と残丘

大東ふれあい運動場整備計画地内の  
遺跡調査報告書

**立山要塞・奥明砦**

1996年1月

発行 大東町教育委員会  
島根県大原郡大東町大字大東1673-1

印刷 (株) 大東印刷  
島根県大原郡大東町大字大東1800

